

本研究は、2011年3月11日の東日本大震災の教訓として、これからの津波防災の基盤の一つとなるように、個々の沿岸地域社会において、より確かな津波災害史を構築する方法の提起と実践を目的とした。対象は、東日本大震災の被災地である仙台平野において、海溝周辺で起こった地震を波源とする津波災害痕跡である。

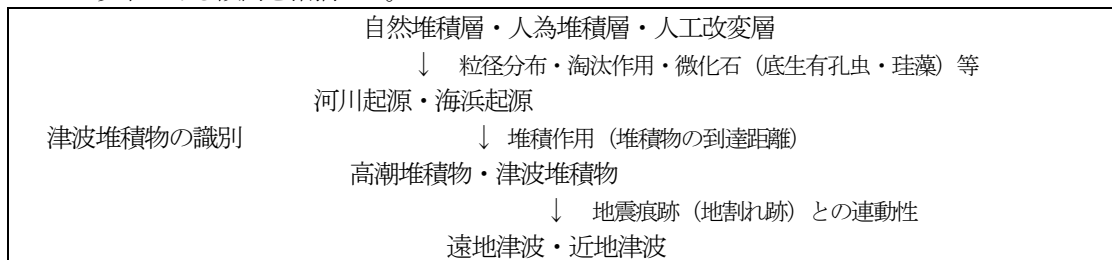
本研究は、第1章から第6章まで、以下のように進めた。

第1章「津波災害の認識と痕跡調査研究の現状」では、エーゲ海沿岸で世界最古の津波災害痕跡研究（紀元前2000年紀）が行われている現状と、そこには世界最古の津波災害記事（426BC）があること、日本列島における最古の津波災害痕跡（弥生時代）と津波災害記事（AD684）を確認したうえで、津波痕跡研究が本格的に行われるようになった1980年代後半から東日本大震災までの研究を振り返る。そして、東日本大震災以降、より確かな津波災害史の構築のために、考古学、歴史学、地質学、地形学、堆積学等、関連する多分野の成果を総合化した議論の必要性を認識した。

第2章「地層の理解と調査研究方法」では、考古学と関連分野で地層の理解の共有をはかり、発掘調査で検出される被災遺構を対象とした津波災害痕跡の調査研究における5項目を具体的に示し、それらを総合化する方法を提起した。

津波災害痕跡調査研究法	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 津波堆積物の識別</li> <li>2. 年代・時期の推定</li> <li>3. 地形・海岸線の復元</li> <li>4. 津波の規模の推定</li> <li>5. 津波の波源の推定</li> </ol>
-------------	--

この調査研究の基本は、現代の津波痕跡から過去の津波痕跡を考えることにある。重視されるのは津波堆積物と高潮堆積物の識別であり、一つの基準として、堆積物：砂層の海岸線からの到達限界が、津波は1kmを超えることがあり、高潮は0.5km以下である傾向を指摘した。



第3章から第5章までは、その方法にもとづいた仙台平野における研究の実践であり、文献史料がなく津波痕跡から考える弥生時代、文献史料『日本三代実録』と津波痕跡から考える平安時代、津波痕跡が明確でなく複数の文献史料から考える江戸時代の3例を報告した。

第3章「弥生時代中期の津波災害」では、弥生時代の津波痕跡から、東日本大震災の津波痕跡をもとに津波の規模と波源を推定し、沓形遺跡などで検出された被災遺構：水田跡と、津波災害を前後する集落動態から、社会の変化を考えた。その結果、津波災害は広範囲に及び、沿岸部の集落が廃絶し、集落立地が大きく変化しており、津波が社会に大きな影響を与えたことが知られた。

第4章「平安時代貞観11年(869)の津波災害」では、平安時代の津波痕跡から、東日本大震災の津波痕跡をもとに津波の規模を推定し、『日本三代実録』の記事を史料批判したうえで、地震との連動性を確認し、下増田飯塚古墳群で検出された被災遺構：水田跡と、津波災害を前後する集落動態から、社会の変化を考えた。その結果、津波災害は沿岸部に限定的で、集落立地は変化しておらず、津波が社会にそれほど大きな影響を与えていないこと、『日本三代実録』に記された被害の内容は事実を過大視していることが知られた。

第5章「江戸時代慶長16年(1611)の津波災害」では、江戸時代の津波痕跡の可能性を高大瀬遺跡で検討するとともに、いくつかの文献記事を史料批判したうえで、地震と津波の連動性を確認し、明確な津波災害痕跡がないなかで、津波災害を記す史料から、社会の変化を考えた。その結果、具体的な津波災害がわかるのは三陸沿岸地域に限られ、仙台平野や福島県太平洋沿岸部では不明であり、課題とされた。

第6章「総合化による津波災害痕跡の調査研究」では、弥生時代、平安時代、江戸時代の津波災害の研究が関連分野と連携して進められてきた過程を整理し、東日本大震災の津波痕跡との比較検討を行った。その結果、弥生時代の津波は東日本大震災の津波と同じかやや大きく、平安時代の津波は東日本大震災の津波よりやや小さく、江戸時代の津波は不明であった。そして、これらの成果を通して、本研究で提起した多分野の総合化による津波災害痕跡調査研究法の有効性を確認するとともに、他の自然災害痕跡調査研究への考古学の貢献を展望した。

本研究は、津波災害痕跡研究の現状をふまえ、新たな調査研究法を提起し、仙台平野における三つの時代を対象とした実践によってその有効性を示すことで、体系化された方法論を初めて確立した意義がある。今後、世界中の沿岸地域の研究の進展に貢献することが期待される。